# 園のおたより

第　３　号

令和５年６月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## なぜ縁石の上を歩くのか

園長　関　由起子

２組さんと一緒に遠足で別所沼公園まで出かけた帰り、歩道の縁石の上を歩きだす子どもたちがいました。移動時はペアのお友達と手をつなぐ約束をしていましたので、「危ないからやめなさい、お友達と手を繋いで！」と言うべきだったんでしょうが、みんな疲れていて、そしてもう少しで幼稚園に到着です。それに自分も昔縁石の上を歩くのが好きだったことを思い出し、それほど危険ではないので後ろから見守ることにしました（無事に園に到着しました）。

なぜ子どもは縁石の上を歩きたがるのでしょうか。その理由の一つは「アフォーダンス」であり、デザインの分野では「自然に人をある行為に誘導するためのヒント」のことです（私は以前、医療事故防止に有効なアフォーダンスを活用したデザインについて考える仕事をしていました）。幼稚園ではたくさんのアフォーダンスがあり、緑の芝生は走りたくなるように、はしごのような形状は渡りたくなるように、牛乳パックは何かを作りたくなるようにと子どもたちを誘い、遊びの多様性を引き出ししています。

一方で、このアフォーダンスにより大人では生じないような事故が子どもには起きます。子どもはデザインの誘惑に大人よりも強く引かれ、穴には何かを差し込みたくなる、弾みそうな物体があればジャンプしたくなる、台があればのぼりたくなり、その結果事故や怪我が生じます。私の甥は、コンセントの穴に強く惹かれ、フォークを差し込み感電して飛ばされましたことが 2 回ありました。ではこのような事故を防ぐためにはどうしたら良いか。子どもは言い聞かせても誘惑には勝てませんので、アフォーダンスを誘発させないデザインにする、あるいは誘発されても事故が起きないようにすることが有効です。例えばコンセントの穴は塞ぐ、ジャンプしても割れない強度にする、縁石ではなくガードレールにする、などです。

この文章を書くためにググったところ、縁石の上を歩きたくなる理由が NHK の「チコちゃんに叱られる」で紹介されており、横断歩道の白線の上だけを歩くかどうかで、いわゆる大人度を測っていました。皆さんはいつから縁石の上を歩かなくなりましたか（私はだいぶ大人になるまでこっそり歩いていたような気がします）。

# 名付けの面白さ

今月は、地域の園の先生方などを招いての「公開保育研究会」や、各クラスの保育を職員で見合った後に、それぞれの視点から協議する「園内研究保育」がありました。幼稚園での「遊び」について考える中で、子どもたちがイメージの世界をいっぱいに広げていく姿についての話題もあり、改めてその姿の意味を捉え直す機会となりました。

段ボール箱は、子どもたちが「警察署のパトカー」と名付けた時から、「パトカー」として使われます。同じ段ボール箱が時として「宅配車」になったり「トラック」になったり、他にも、郵便車、電車、バス、遊園地の乗り物、風呂、温泉など、さまざまなものになったりします。園庭の好きなところに敷いて使えるゴザは、私の「おうち」と名付けた時から、「おうち」になります。同じゴザがベッド、〇〇屋さん（お店）、空飛ぶじゅうたん、荷物置きの倉庫など、その時々に名付けられ、遊びの場になっています。

今月、３組の保育室を覗いてみると、いろいろに名付けられた遊びの場がありました。「新幹線工場」「折り紙美術館」「虫と石研究所」など、素敵なわくわくする名前がありました。２組の保育室にある「はま寿司ピザ屋さん」というのも、何だか気になる名前です。

私が本園で担任として過ごしてきた過去の保育の記録からも、いくつか思い出してみます。「パトロール」「花火大会」「おばけの種」「流しそうめん」「きなこ温泉」「ドッグショー」「うさぎニュース」「ハシビロコウ研究所」「ラジオショー」「映画ショー」「わくわくショー」「ねこショー」「高速道路」「ワニの家」「虫のひろば」「モンキー山」「恐竜博物館」「すもう道場」「探偵事務所」「ニューススタジオ」…、幼稚園の中ですが、様々なイメージを広げ、遊びを名付けていました（なお、これらは全てが１年間で出てきた遊びではなく、数年分の保育から思い出したものです）。

遊びに使う物、遊びに使う場所、遊び方、遊びの役などを、自分たちで名付けていくことは、それらを確かなものとしていくことにつながっているように感じます。子どもたちが興味をもつ歌や絵本、物語の題名も、「おや？」「何だろうな？」と興味をそそられる名が付けられているものがたくさんあります。作詞家や作家の方々は、きっと、子どもたちが遊びに名付けていく姿も、面白がってくれるのだろうと想像します。

子どもたちの傍で働く職として必要なことはたくさんありますが、その一つは「ユーモア」をもつことだと考えています。子どもたちが名付けていく面白さを共にしながら、引き続きわくわくするイメージの世界を広げていきたいと思います。

（副園長）

# クラスだより

## １くみ

**「触れることの心地よさ」**

梅雨の時季になりました。雨音を耳で感じ、雨の匂いを鼻で感じたりしながらこの季節ならではの生活を送っています。そんな日々の中で「子どもたちにとって触れる」ことがとても大きな意味をもっているのだと感じる場面が多くあります。

遊びの中で子どもたちは様々な物や素材に触れます。例えば砂や水は触って心地よいだけでなく、混ぜてみても感触が変化します。ある日差しの暑い日、砂にじょうろを使って水をかけてみると、砂が柔らかくなることに気が付く人がいました。その柔らかくなった部分を掘っていくと穴ができて、その穴にまた水を入れて、と繰り返していくと、穴はどんどん深くなっていきました。いつのまにかその穴は水をたっぷりと貯える「海」になっていました。裸足になって海に入ってみると、水の冷たさ、砂の感触をじっくり味わうことができました。これからより暖かくなっていって、水や砂をダイナミックに使う体験を大切にしていきたいと思います。

物などに触れることに加えて、人と人との触れ合いが子どもたちの生活とってはなくてはならない要素です。登園時、友達と手をつないで保育室の前までやってきたり、教師と手をつないで一緒にいたりすることでほっとしたような表情を見せたりする姿があります。ある朝、遊び着のボタンをかけるのに困っている人がいると、近くにいた人が「私がつけてあげる！」と手を貸す姿がありました。ボタンがかけ終わると、「今度は僕がつけてあげる」と、今度は逆にかけてもらった人が手伝う姿がありました。子どもたち同士が支え合いながら幼稚園という場所で生活しているのだと改めて知ることができた場面でした。

いろいろな物や素材の感触を味わったり、人と触れ合ったりする機会を通して、安心する気持ちやのびのびと遊ぶ姿につなげていきたいと考えています。

## ２くみ

**「子どもたちの世界」**

６月は、２組のみんなで別所沼公園に歩いて遠足に行ったり、お家の人と一緒に幼稚園で遊んだり、子どもたちにとってわくわくすることがたくさんある１か月となりました。前日には「明日は遠足だよね」「明日はお母さんたちと遊ぶ日だ」と、当日になることを心待ちにし、当日は普段とは異なる特別な時間を改めて感じているようでした。

さて、普段の生活の中では、お化けのマントを身に着けて気の合う友達と一緒に遊んだり、カラーポリ袋で作ったドレスを身に纏いプリンセスになりきったり、物や遊びの場を介して友達との繋がりを感じたり、イメージの世界を分かち合ったりしながら遊ぶ姿があります。

ある日、ままごとで遊んでいた人が色画用紙を小さく切って料理を作っていると、Ａさんはそれを真似してチーズピサ作りを始めました。「ピザを置いておくところが必要だ」と呟いていたので、作った物を置いておくスペースを作ると、そこが“ピザ屋さん”になり、他の友達も集まってきました。すると、回転寿司に行ったことのあるＢさんが「ここはお寿司もあるんだよ」と言ったことで、お店の中に“ピザを運ぶレーン”を作ることになりました。ダンボールでレーンを作ってみますが、なかなか思ったようにピザが滑りません。プラフォーミングを使ってレーンを坂道にしてみたり、前に作ったパトカーを「ピザパトカー」に変身させてピザを乗せて滑らせてみたりして、ようやくピザを流すことができました。繰り返し遊びに関わる中で、うまくいかないことに直面しながら、自分のイメージ通りになるよう試行錯誤することを楽しんでいました。

子どもたちの遊びには、大人が驚くような面白い世界で溢れています。その世界にどっぷりと浸かって遊べるよう、一人一人がもつイメージの世界を一緒に楽しんだり、やりたいことを実現できるよう一緒に考えたりしながら過ごしていきたいと思います。

## ３くみ

### 「1 人からみんなの種に」

「風のおはなし」という歌があります。

♬かぜが　おはなし　するたび　くさは　そよそよいいきもち
かわが　ゆらゆら　ながれたら　おさかな　すっかり　いいきもち
もりの　くうきが　はいってる　みずは　やっぱり　いいきもち
そらが　ゴキゲンナナメだと　　くさは　ワクワクしてるんだ
あめが　ザアザア　おちてきて
くさは　なーんていいきもち　あめがやんだら　まえよりも　かぜも
とってもいいきもち
やまと　かわと　もりと　うみ…　ぜんぶつながってるらしい
かぜと　くもと　あめと　うみ…　ぜんぶつながってるらしい～♬

作詞：三浦徳子　作曲：大森俊之　編曲：大森俊之

４月から歌っている歌です。

この歌をうたうと、不思議といろいろな関心の種が生まれます。

ある日は、「そういえば　おやすみ中、雨が降らなかったね」「野菜は大丈夫かな。かわいそう。サツマイモは大丈夫だったかな」その日はサツマイモの畑に行くことにしました。またある日は、「どうして川の水はしょっぱくないのに、海の水はしょっぱいんだろう」「なんかさ、海には塩を撒いた人がいるらしいよ」「そんなわけないよ」「でも、〇〇さんの言うことは本当な気がする」・・歌からおもしろそうな物語が始まることもあるのですね。

さて、海の水はどうしてしおからいのでしょうね。わたしは、あの時の会話がなかったら、「当たり前のこと」になっていて、考えることも不思議に思うこともなかったかもしれません。おかげで、素敵な昔話に出合いました。「しおふきうす」というおはなしです。～引けば願い通りの物がでてくる臼を弟が手に入れます。欲張りな兄がその臼を盗み、船で逃げます。逃げる途中、お腹が空いたのでこれまた盗んだ菓子折りを開けて食べます。口の中が甘くなったので、塩が欲しくなり、臼を引いて塩をだします。欲張りなのでたくさん塩を出しますが、止め方を知らないので、船が塩でいっぱいになり、とうとう船は沈んでしまいました。その臼が塩を出し続けて、海の水はしおからい、ということです。～　海の底には、まだまだ塩を出し続けている臼があるのかもしれませんね。

１人の不思議に思う気持ちや、その人の世界が、周りの人や自分の想像を巡らす種となるのですね。物事の本質はきっと子どもたちが知っているのだと思います。